【伝承・民間で始まる蚕糸業】

風穴と糸のまち こもろ物語

信州 小諸

発行 特定非営利活動法人 糸のまち・こもろプロジェクト
〒384-0802 長野県小諸市乙1036（事務所）
TEL.090-4158-8088（清水寛美） FAX.0267-23-5945

■制作：菊池 憲一
■監修：野澤 敬 「純水館ものがたり」共著者
NPO法人 糸のまち・こもろプロジェクト顧問
清水 長正 早稲田大学非常勤講師

2016.3 初版
「糸のまち・こもろ物語」
2017.9 改訂版1 全国風穴サミット版
「風穴と糸のまち・こもろ物語」
2021.7 改訂版2
伝承・民間で始まる蚕糸業
「風穴と糸のまち・こもろ物語」
2022.7 改訂版3
2024 改訂版4

令和6年度 小諸市市民活動促進事業 補助金活用事業

「糸のまち・こもろ」の風穴と蚕種貯蔵

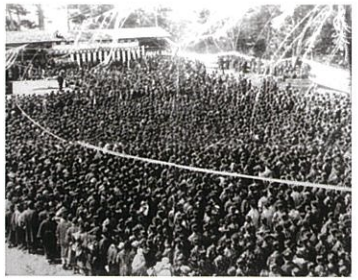
小諸の蚕糸発展

◆明治・大正と続いた黄金期

長野県は「蚕糸王国」と呼ばれる。蚕糸とは①養蚕②蚕種③製糸の3つの総称だ。養蚕は蚕を育て、繭を作る。蚕種はより良い蚕種を製造する。製糸は繭から糸を取り出す。長野県はそれらすべてが全国一だった。

小諸の蚕糸業は、明治7年、豪商の高橋平四郎が丸萬製糸場を創業したときにはじまる。平四郎は、生糸の海外輸出を目指し、在来品種の黄絹種から白絹種への転換に取り組んだ。桑の品種改良も行った。製糸、蚕種、養蚕のすべての改良に取り組んだ。丸萬の操業期間はわずか8年だったが、その開拓者精神は、豪商の小山久左衛門が引き継いだ。

明治23年6月、小山久左衛門は、製糸工場・純水館を設立した。業績を伸ばした。大正13年から昭和2年の釜数は1920釜で、最多だった。たくさんの工女さんで街は賑わった。小諸の製糸業黄金期だった。


純水館 創立40周年祝賀会(懐古園馬場にて)

◆養蚕を支える蚕種と風穴

養蚕農家も増えた。桑園面積は、明治後半から昭和にかけて、増加した。養蚕農家一戸当たりの収穫量も増えた。それまでは春蚕だけだったが、風穴の利用などで夏秋蚕もできたからだ。大正11年の養蚕農家の戸数は2934戸で最高となる。大正3年、片倉組の今井五介らが一代雑種の蚕種を製造し、好成績を収めた。小諸も採用し、夏秋蚕の品質向上につなげた。

■参考文献／小諸市誌近・現代篇

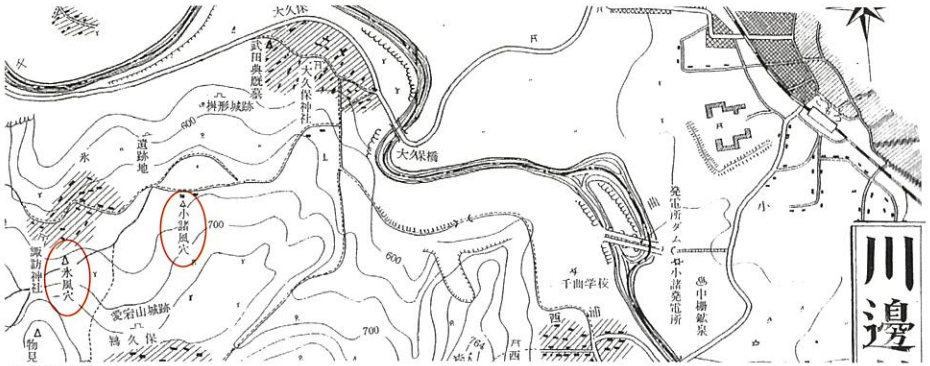
◆4つの蚕種貯蔵所

明治40年～42年頃、川邊村の大久保・氷には4つの蚕種貯蔵会社があり、合計14の風穴が存在していた。

①東信風穴(川邊村大久保前山)
②小諸風穴(川邊村大久保前山)
③氷風穴(川邊村大久保氷)
④柳澤風穴(川邊村大久保前山)
⑤小山龍五郎他2名(川邊村大久保氷・個人所有)

小諸停車場からの往来も良く、電話電報も確立していたため、全国の蚕種業者との取引が可能だった。

氷風穴同益社(写真提供:前田正孝氏)



川邊村全図

風穴とは何か

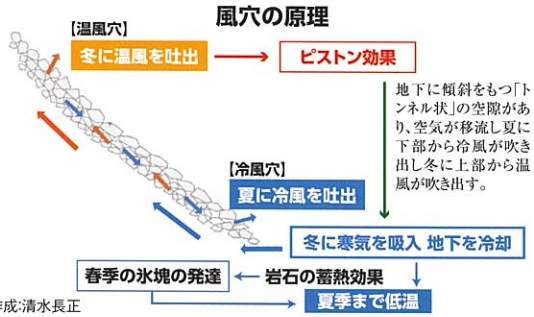
◆天然の冷却システム～風穴

夏、冷風があふれ出るところが風穴だ。冷風穴と呼ぶ。

日本の風穴のほとんどは、たくさんの礫が堆積した崖錐や岩塊斜面などにある。地下には広い空隙やトンネルがある。ここに、冬の寒さを夏まで効率よく保存するシステムが備わっている。寒さを蓄積する保冷剤は、冬場に冷却された岩石だ。岩石が冷たさを維持する。さらに、春から夏、地下の隙間に残る氷が冷たさを保つ。

冬、岩塊斜面の最上部で、雪を溶かし、暖かい空気が吹き出るところがある。温風穴だ。岩塊斜面の最上部の温風穴と最下部の冷風穴はつながっている。地下のトンネルを流れる暖かく軽い空気は上から、冷たく重い空気は下から吹き出す。岩塊斜面の内部と外部の温度差が大きいほど、吹き出す冷風は涼しい。

■参考文献／「日本の風穴」など



作成:清水長正

◆生糸の大量生産に貢献

蚕種貯蔵として風穴利用が始まる前は、春蚕の1回飼育が普通だった。養蚕の時期は春に限られた。

ところが、風穴の低温を利用した蚕種の冷蔵保存の確立で、年に5～6回、計画的に養蚕ができるようになった。風穴は、繭の量産、生糸の大量生産に多大な貢献をした。

小諸風穴は5つの風穴を持つ。形は四方形と円形。深さ約1㍍65㌢、周囲に石を積み、天井を作る。各所に気抜きを設け、天井上には木屑を厚く敷いて冷気の放散を防ぎ、温度を保つ。瓦葺土蔵作りで、入口は二重の扉で、出入りに際し、外気が侵入しないようにした。冷蔵室内は、内壁全部を亜鉛板で包装し、側面各所に通風口を設ける。縦横に棚を作り、蚕種箱を積み入れる。蚕種を入れる3月から取り出す9月まで、風穴内の温度は、最高が摂氏6.1度、最低がマイナス0.6度だ。湿度は88～90度。

明治40年制定の長野県風穴取締規定では風穴内の温度は摂氏7.15以内だから基準を満たす。

■参考文献／「蚕種冷蔵小諸風穴案内」

氷風穴同益社

◆現在も貯蔵庫として活用

日本の風穴を数多く調べている、清水長正・早稲田大学非常勤講師は語る。

「江戸の元禄時代から300年以上も使い続けている風穴は、日本中で氷風穴だけです」

氷風穴の利用は、元禄年間に遡る。1個の風穴を造り、凍氷を貯蔵し、時の藩主に献納していた。

明治6、7年頃、春蚕種の残種が多く、その発生期を迎えた。一時の窮策として、風穴に蚕種を貯蔵した。取り出して飼育したところ、発育良好で充分の成績が得られた。

前田信右衛門は、この経験をもとに、蚕種貯蔵事業を始めた。氷風穴同益社を創設し、社長に就任。2代目の善十郎も事業拡大に貢献した。蚕種貯蔵量は長野県内で常に上位。

昭和7年頃、氷風穴は蚕種貯蔵をやめた。だが、所有者の1人、土屋満は、氷、玉ねぎ、りんご、酒などを風穴に入れて使い続ける。

現在、全国で活用中の風穴は20ほど。氷風穴は、その中のトップランナーである。

氷風穴4号

小諸風穴 蚕種貯蔵所

◆蚕種貯蔵高、全国一の風穴

小諸風穴は、世界遺産・荒船風穴よりも大きな蚕種貯蔵所だった。蚕種の貯蔵量は、荒船風穴を上回る。

創設者は、山っ気のある柳澤大六。事業を支援したのは大六の弟の柳澤禎三で、小諸銀行頭取を務めた銀行家だ。柳澤兄弟が日本一の蚕種貯蔵量を誇る小諸風穴を創った。

2代目の柳澤大六三郎は初代大六の3男、3代目の柳澤七郎は初代大六の7男だ。

2代目の大六三郎は、文明の利器をいち早く取り入れて、小諸風穴の運営に活かした。また、東京の駐屯地での軍隊時代の人脈を小諸風穴の運営に活かした。3代目の七郎は、小諸義塾の卒業生で、島崎藤村から国語、英語を教えてもらった。運動神経は鈍かったが、蚕紙の蚕の卵を透かして見るだけで、あと何日で孵化するか見抜く特技があった。

平成元年、団地と道路建設のため、野放しだった小諸風穴の土地を売却した。小諸風穴は「幻の風穴」になった。

■参考文献／川辺村誌（昭和32年8月）など

氷風穴、小諸風穴の歴史と風穴の制度

江戸・元禄年間（1688～1704）
凍氷を氷風穴に貯蔵し、藩主に献上した。

幕末明治初期以来長野県は、民間が主体となって風穴利用による夏秋蚕の孵化技術を確立。長野県は「風穴元祖の地」である。

嘉永元（1848）
小諸風穴の創設者の柳澤大六が誕生。

嘉永6（1853）
柳澤大六の弟で、小諸風穴を支えた銀行家の柳澤禎三が誕生。

氷風穴同益社社長の前田信右衛門が生まれた。

明治7（1874）
高橋平四郎が小諸町六供に丸萬製糸場を開業。

氷風穴同益社創設。
蚕種貯蔵・氷風穴4号開始。

明治10（1877）
蚕種貯蔵所・小諸風穴が創設。
氷風穴同益社の2代目社長・前田善十郎が生まれる。小諸風穴の2代目・柳澤大六三郎が誕生。

明治11（1878）
風穴蚕種・製造が「蚕業取締規則」で許可される。風穴利用の年間多回育が全国に普及。

明治21（1888）
小諸風穴の3代目・柳澤七郎が生まれる。

明治23（1890）
小山久左衛門、大里村諸で純水館を創業

明治32（1899）
純水館が創立10周年。
5工場357釜の大工場となる。

明治37（1904）
柳澤禎三が小諸銀行頭取になる。

明治39（1906）
長野県は「風穴取締規則」を制定。風穴内部の温度管理や建物の構造使用等を定め、風穴設置を知事の許可制とする。

明治40（1907）
氷風穴4号、改築

明治42（1909）
柳澤大六三郎が日露戦争の軍隊から戻る。

明治44（1911）
氷風穴4号、2回目の改築

明治45（1912）
政府は「蚕糸業法」および「蚕糸業法施行規則」を制定。蚕品種と原料繭の品質確保をはかる。風穴を地方長官（府県知事）の許可制とする。

大正4（1915）
氷風穴4号の所有者・土屋満が誕生。

大正6（1917）
全国222カ所の蚕種貯蔵用風穴の約半数の105カ所が長野県にあった。（農商務省農務局調べ）

大正11（1922）
前田信右衛門、逝去。69歳。

昭和6（1931）
初代・柳澤大六、逝去。84歳。

昭和7（1932）
氷風穴は蚕種貯蔵冷蔵庫として使われなくなった。
多くの蚕種貯蔵風穴は昭和10年前後、その歴史的役割を終えた。

昭和14（1939）
荒船風穴蚕種貯蔵枚数がゼロ。役目を終える。

昭和19（1944）
小諸風穴の2代目・柳澤大六三郎が逝去。91歳。

昭和23（1948）
氷風穴同益社の2代目社長・前田善十郎が逝去。73歳。

昭和53（1978）
小諸風穴の3代目・柳澤七郎が逝去。91歳。

平成元・昭和63（1989）
小諸風穴の土地を売却。小諸風穴は「幻の風穴」となる。

平成13年（2001）
氷風穴の4号を使い続けた土屋満が逝去。86歳。
氷風穴は現在も活用されている。

小諸は蚕種貯蔵量で日本一だった！

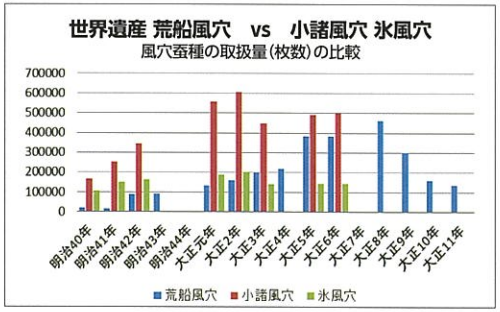
◆世界遺産・荒船風穴を上回る

風穴の実績を量る単位は「枚」である。これは、蚕の卵（種）が産み付けられた「蚕種紙」を貯蔵収容するためである。

全国各地の風穴の貯蔵可能枚数は、1位 荒船風穴 110万枚、2位 富士風穴 100万枚、3位 富岳風穴 59万枚、4位 小諸風穴 42万枚、5位 氷風穴 26万枚であるが、取扱量（貯蔵高3年累計）では、小諸風穴76万枚、富士44万枚、風穴本元44万枚、氷風穴42万枚、荒船は16万枚である。

■全国風穴調（明治42年）より

蚕種紙（小諸風穴蚕種貯蔵所）



■参考資料
信濃蚕糸業史中巻。
「荒船風穴蚕種貯蔵所跡」普及版。群馬県下仁田町教育委員会編（平成26年12月17日）
明治43年、大正8～11年の数字は、荒船風穴の独自調査による。
農商務省農務局取締成績
大正元年、2、3、5、6年。
（NPO法人 糸のまち・こもろプロジェクト調べ）

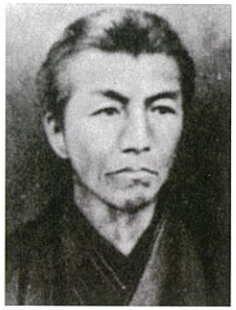
神々のいる風穴

氷風穴には多くの神々がいる。養蚕を守る神様のお稲荷さん、氷を祀る氷神様、そして、子供たちの遊び場、村の鎮守の諏訪神社がある。さらに、子宝の神様・道祖神、水の神様・水神様、自然の神様・天神様がいる。裏山から区内を見下ろす場所には、火事から守る秋葉神社、御嶽信仰にまつわる御嶽山がある。

昨年の暮れ、この御嶽山の頂上近くで、温風を吹き出す温風穴が数カ所、発見された。氷風穴には神々がいるのだ。

「糸のまち・こもろ」を創った人々

高橋 平四郎


高橋 平四郎

◆製糸業の開拓者

平四郎は天保5年（1834）、鎌原村（現上田市常盤城）の名主・田中良左衛門の次男として生まれた。名は民次郎。21歳のとき、小諸荒町の高橋家の養子となる。高橋家は呉服商を営み、小諸藩のご用達をつとめた豪商だった。

24歳で、高橋平四郎を襲名。藩（県）の御牧ヶ原開墾計画に積極的に参加し、開墾地に桑苗を植え、養蚕を行った。

明治5年、官営富岡製糸場の創業時、38歳の平四郎は、有力なブレーンとして活躍した。設置主任の渋沢栄一と場長だった渋沢の従兄の尾高惇忠から「繭買入取次」に任命された。12年までの8年間、政府資金を使って、信州や飛騨から繭を集めた。また、場長の尾高惇忠より工女募集の要請に奔走し、小諸から94名の工女を富岡に派遣した。

◆民間器械製糸場を創設

平四郎は、小諸に器械製糸工場を建てる準備を始めた。設計図などは富岡から学んだ。建設費用は、土地などを抵当に銀行から融資を受けた。

40歳のとき、明治7年7月8日、丸萬製糸場を操業した。32釜、従業員は女60人、男6人。民間資本のみによる県下初の器械製糸場だった。

平四郎は、世界市場に目を向け、質のよい生糸の生産をめざした。10年、東京の第1回内国勧業博覧会で、最高の鳳紋褒賞。11年、パリ万博で入賞。13年、メルボルン万博で二等賞を獲得した。明治15年、国際的な不況で生糸が暴落し、丸萬は倒産した。8年間の操業だったが、「製糸王国」長野県の礎となった。享年56歳。

小山 久左衛門

小山 久左衛門

◆純水館の創業者

久左衛門は文久2年（1862）、小山本家に生まれる。幼少の頃、両親が行う座繰り製糸を見聞きした。丸萬製糸場の繁栄と倒産を目の当たりにして、起業の意義や厳しい現実を学んだ。

小諸駅が開業した明治21年、27歳で家督を相続した。渋沢栄一などの助言を得て、小諸に、器械製糸を興すことを決めた。

23年7月、大里村諸の「弁天の清水」と呼ばれる豊富な湧水の出る場所に、「純水館」をつくった。釜数は100、従業員は女75人、男8人で、丸萬製糸場よりも大きかった。技術も向上し、明治25年、長野共進会の生糸部門で一等賞となる。26年、シカゴ国博で名誉賞銅牌を受賞した。

明治36年、小諸駅近くに工場を移転した。繭の購入・乾燥・貯蔵・繰糸・再繰まで、製糸業の一連の施設を集めた。移転後、売上高は飛躍的に伸びた。創業20周年の43年には工場数11、釜数837、従業員は約1000人へと拡大した。

諸の工場

◆小諸義塾の運営を支え続ける

久左衛門は純水館の経営のかたわら、地域のために数々の貢献をした。その一つは、木村熊二が創立した小諸義塾の支援だ。小諸義塾に併設された女子学習舎の開校にも尽力した。

明治34年、小諸町長に推薦されたが、多忙を理由に辞退した。だが、教育には熱心で学務委員（今の教育委員）は他界するまで、12年間、務めた。

大正3年、小諸商工会議所が設立され、初代会頭にもなった。久左衛門は、器械製糸業を立ち上げ、純水館の地位を不動のものとした。享年56歳。

富岡と小諸 深いつながり

世界遺産・官営富岡製糸場は、明治5年に創業した。創業時、小諸の豪商・高橋平四郎は、富岡製糸場の「繭買入れ取次ぎ」の役を命じられ、信州・飛騨方面から繭を買集め、富岡に送った。工女集めにも貢献した。小諸からは94人、県内最多の工女を富岡に派遣した。

富岡製糸場で、平四郎は製糸業経営の基本を身に付けた。小諸工女94人は洋式器械製糸の技術を習得した。

明治7年7月、平四郎は小諸に県内初の民間器械製糸場「丸萬製糸場」を創業した。優れた小諸工女の活躍で、丸萬の生糸は世界的な評価を得た。「糸のまち・こもろ」を築き上げた。

小山 邦太郎

小山 邦太郎

◆製糸の申し子

邦太郎は明治22年、父久左衛門、母梅路の長男として誕生。平四郎が逝去した年で、「平四郎の身代わり」のように生まれた。酢久商店や純水館の後継者として、きびしいしつけの中で、成長した。

25歳で、工女養成所の運営をまかされ、製糸業への第一歩を踏み出した。29歳のとき、久左衛門が亡くなり、家督を相続した。純水館を継いだ久左衛門の弟清右衛門が急逝し、31歳で純水館の館長に、就任した。

大正13年、35歳のとき、純水館5工場と佐久蚕種株式会社を統合して、株式会社純水館を設立し、社長に就任した。(表1参照)

昭和2年、純水館は釜数1960、職工数2150人。小諸の製糸業の絶頂期だった。

昭和3年、邦太郎は、地域と業界に推薦されて衆議院議員に当選した。39歳だった。以後、衆議院議員当選6回、参議院議員3回を数える。国政の側から製糸業の振興に努力した。

昭和5年の世界大恐慌から太平洋戦争まで、製糸工場は生産縮小を余儀なくされた。

邦太郎は、父の事業拡張路線ではなく、事業縮小、再編に乗り出し、経営の確実化を図った。

戦後、生糸は外貨獲得の輸出品として、経済復興の一翼を担った。純水館は自動繰糸機を導入し、生産規模を拡大した。しかし、ナイロンの登場で製糸業は脇役となった。

純水館は、昭和42年、製糸業を廃止した。邦太郎は、事業の継続を望み、純水館企業組合として細々と続けたが、遂に昭和57年、操業を停止した。純水館92年の歴史の幕を閉じた。享年92歳。

■表1　株式会社純水館の工場

・第一工場(袋町)	538釜
・丸純工場(六供)	550釜
・丸東工場(紺屋町)	306釜
・丸久工場(小原)	240釜
・屋代工場	286釜

糸のまち・こもろ 激動の100年

天保5(1834)　高橋平四郎生まれる
文久2(1862)　小山久左衛門誕生
明治5(1872)　富岡製糸場が創業

糸のまち・こもろの夜明け

明治7(1874)　丸萬製糸場が操業
明治10(1877)　内国勧業博覧会で最高の賞を受賞
明治11(1878)　パリ万博で入賞
明治13(1880)　メルボルン万博入賞
明治15(1882)　丸萬製糸場が倒産
明治17(1884)　秩父困民党事件
　　養蚕農家が困窮
明治18(1885)　塩川清兵衛が丸萬を引き継ぎ、
　　浅岳社設立
明治21(1888)　信越線小諸駅開業
　　直江津～軽井沢間
明治22(1889)　平四郎、逝去。56歳
　　小山邦太郎、誕生
明治23(1890)　久左衛門、大里村諸で
　　純水館創業100釜
明治25(1892)　純水館、浅岳社を買収
　　第二純水館(88釜)に
明治26(1893)　私立小諸義塾創立
　　久左衛門が運営支援
明治27(1894)　日清戦争(～1895)
明治30(1897)　純水館、日英博覧会で
　　一等賞金牌を受賞
明治33(1900)　純水館、パリ万博で銀牌、
　　進歩賞を受賞
明治37(1904)　日露戦争(～1905)
大正3(1914)　久左衛門が小諸商工会議所会頭
大正7(1918)　久左衛門、死去。56歳
大正8(1919)　純水館創業30周年
　　釜数1312
大正12(1923)　関東大震災
　　茅ケ崎工場倒壊
昭和3(1928)　邦太郎、衆議院当選
　　以後、当選5回
昭和4(1929)　純水館創業40周年
　　釜数1920
昭和16(1941)　太平洋戦争始まる
　　軍需工場へ転換が進む
昭和25(1950)　朝鮮戦争で糸況一変
　　急騰
昭和29(1954)　小諸市誕生
　　邦太郎、初代市長
昭和31(1956)　邦太郎、参議院当選
　　49年まで3期18年間
昭和36(1961)　純水館、多摩式自動繰糸機購入
昭和39(1964)　純水館、袋町の土地を
　　(株)つるやに売却
昭和42(1967)　純水館、製糸業を廃止
　　純水館企業組合を設立し、継続する
昭和56(1981)　純水館企業組合を閉鎖。解散
　　邦太郎、逝去。92歳

「糸のまち・こもろ」を築いた信州小諸工女94人

明治5年、官営富岡製糸場が設立された。全国から数多くの工女さんが洋式の製糸技術を習得するために、富岡に入場した。長野県からは337人(明治6～24)が入場した。群馬、滋賀に次ぐ3位だ。県内では小諸市から94人の工女さんが入場した。飯田60人、長野53人、上田33人を上回り、県下トップである。信州小諸工女94人(13歳～20歳)は「糸のまち・こもろ」の礎となった。

富岡帰りの工女さんの活躍で、県内の器械製糸業は急速に普及した。地域別普及率(明治12年度)では長野県は器械化率53・8%で、2位の岐阜21・4%、全国平均3・8%と比べて突出していた。明治23年、長野県は生糸生産高で、群馬県を抜いてトップに立つ。信州は「生糸王国」となった。

富岡から小諸に帰郷した工女さんは、高橋平四郎が明治7年7月に開業した丸萬製糸場で働いた。経営者の技術改良と工女さんの優れた"手の技術"によって、丸萬の生糸は質を高めた。パリ万博、メルボルン万博で入賞し、国際的な評価を得た。

設立時の富岡で、工女さんの賃金は能率給が原則だった。一等工女は月1円75銭、2等工女1円50銭、3等工女1円、等外工女75銭だった。明治後半、全国各地の工女さんの中で、1年で一軒家が建てられるほど稼ぐ「百円工女」と呼ばれる優秀な工女さんが現れた。

明治から昭和にかけて、日本は質・量ともに世界一の生糸輸出国となった。世界一を支えたのは、髪の毛の10分の1の細さの糸を操り、均一にする高度の"手の技術"を身に着けた数多くの工女さんたちだった。

■長野県から入場した工女たち

現郡市名	人数	別雇	計
長野市	46人	7人	53人
松本市	3人	—	3人
上田市	30人	3人	33人
岡谷市	1人	—	1人
飯田市	60人	—	60人
諏訪市	1人	—	1人
須坂市	5人	—	5人
小諸市	70人	24人	94人
中野市	5人	—	5人
飯山市	12人	—	12人
塩尻市	7人	—	7人
佐久市	1人	—	1人
千曲市	7人	—	7人
東御市	3人	—	3人
南佐久郡	5人	—	5人
小県郡	12人	—	12人
諏訪郡	1人	—	1人
下伊那郡	7人	—	7人
木曽郡	2人	—	2人
上高井郡	6人	—	6人
下高井郡	7人	—	7人
上水内郡	5人	—	5人
下水内郡	4人	—	4人
郡市不詳	3人	—	3人
総計	303人	34人	337人

(「工女名簿」片倉工業委託資料による)
富岡製糸場総合研究センター　今井幹夫所長作成

注:別雇とは明治9年度はヨーロッパの繭の不作に対して日本では大豊作となった。このため将来の高騰を見越して大量の繭を購入し一般の工女を超える賃金で別雇という形で腕の立つ工女を臨時的に雇って生産の向上を図った。大部分の工女は官営・富岡製糸場の経験者であった。

小諸紬（信州紬）

紬は、くず繭や玉繭（さなぎが二つ入っている繭）などからとった糸を織ったものです。主に養蚕農家の自家用に生産されていたため、販売目的の工房は市内に数軒程度でした。

模様としては、平織りの絣や縞がありました。

小諸紬は、経済産業大臣が指定する伝統的工芸品の「信州紬」（昭和50年〔1975〕指定）のひとつになっています。

商家のたんすに眠っていた45年前の小諸紬。
伝統工芸品の織元（紺屋町）住谷織物 住谷忠雄
普段着だった紬がおしゃれ着として扱われるようになりました。（所蔵 清水寛美）

純水館記念碑（小諸市六供）

純水館記念碑と工女の墓

小諸の製糸業を支えた製糸場純水館を記念して、平成10年（1998）に建立された碑です。

純水館は、県内初の民営製糸場丸萬製糸場が閉じた後、明治23年（1890）に誕生しました。経営の中心になったのは、小山久左衛門でした。

大正末から昭和初めにかけて全盛期を迎え、昭和2年（1927）には釜数1960、従業員数2150人を数えるまでになりました。その後、化学繊維の登場によって製糸業は全国的に衰えて、純水館も昭和57年（1982）におよそ一世紀にわたる歴史に幕を閉じました。

純水館で働いた工女の中には、この地で亡くなり、何らかの事情で引き取られない人もいました。工場を望む地にお墓が建てられ、大事に供養されてきました。

工女の墓 5基（小諸市三和）

工女は明治二十三年制定、明治四十三年改訂の「純水館組合申合規定」に従い就業。内容は、勤務・食事・入浴時間、休日、賃金、病疾病等の規定であり、明文化・掲示され規律ある生活を送っていた。創業当初は六月から十一月までが稼働月であったが、養蚕技術の発展とともに三月から十二月と期間が延長。

繰糸だけでなく夜学を開設し読み書き・計算・裁縫等があり、成績優秀者には補習学校の免状が授与された。また演芸会・運動会等、月に二回以上の催しが開催され、工女への厚生に務めた。工女たちは毎年年末には、給料や土産を持って家族の待つ故郷へ帰り、正月を迎えるのを楽しみにしていた。

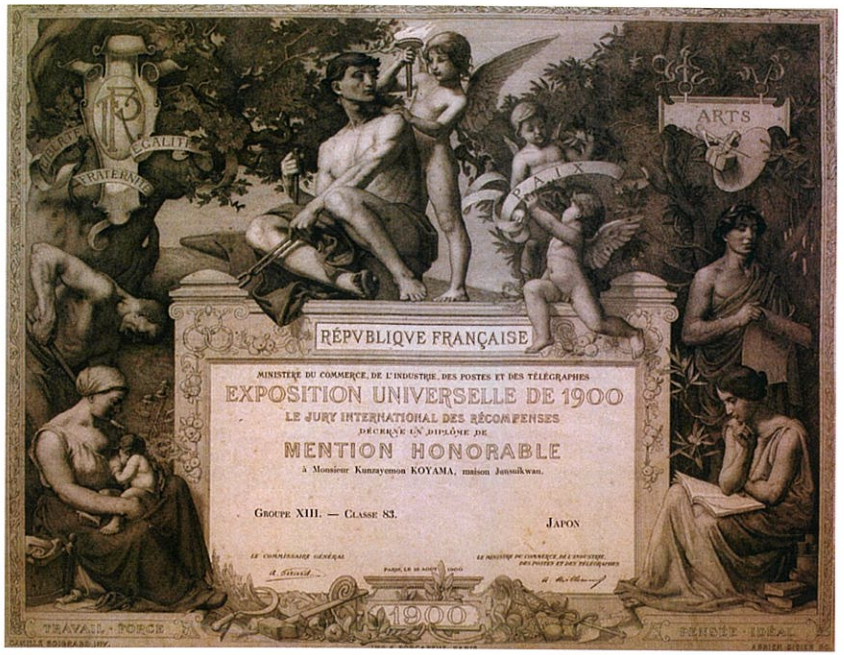
お遊戯会

運動会

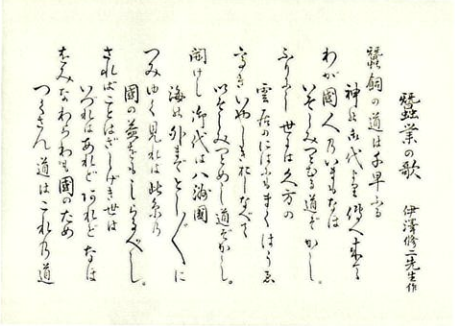
大正6年　長野市城山館前（20年以上謹續表彰）（饗場英利所蔵）

大正十二年
大日本蚕糸会ヨリ、摂政宮殿下御大婚御良料糸ノ繰糸を嘱託セラル
神聖な繰糸をしているので見ちゃならんの意（糸のまちプロジェクト所蔵）

身を清めてから、献上繰糸をした糸姫たち（饗場英利所蔵）



パリ万国博覧会　1900年（明治33年）8月8日、銀杯受領賞（純水館資料館所蔵）
国際審査委員は栄誉賞の免状を純水館・小山久左衛門様に授与する
[海外受領]・明治26年 アメリカシカゴ
・明治37年 アメリカセントルイス
・明治43年 日英博覧会


蠶業の歌　伊澤修二先生作

社歌 蚕業の歌（井澤修二作）
日本を近代化させるため、「社歌」は労働に対する13～22歳の女工さんの意気込みを高揚させた。
出典：塚田・清水、生糸を製造した純水館と社歌、加工技術、vol57（11）、20-21（2022）
（読み解き：塚田益裕 元信州大学繊維学部特任教授）

明治23年6月9日長野縣北佐久郡役所の焼印・第33号
生糸製造所釜百個　北佐久郡大里村　小山久左衛門

純水館・生糸商標（縦8.7cm 横6.3cm）　製造した生糸を海外に輸出用。他に10枚。
純水館の商標は、春繭と夏秋繭でそれぞれ五種類計十種類があり、優等品はエクストラ金菊水・金月で以下金菊水・金月、菊水・月、弁天・蜻蛉、芦鴨等グレード毎に柄で区分をしていました。また、年代により複数の絵柄があります。
（糸のまちプロジェクト所蔵）

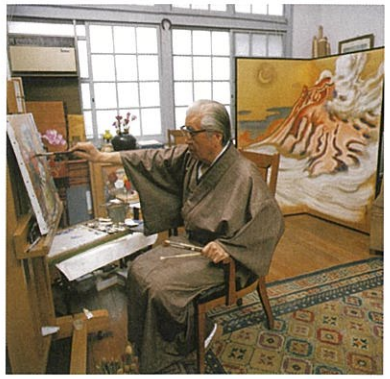
開業前日の写真「相州茅ヶ崎町純水館女工江之島遊覧紀念（大正6年2月4日）」（名取龍彦氏所蔵）

◆純水館茅ヶ崎製糸所

大正6年、茅ヶ崎駅北側に大工場「純水館茅ヶ崎製糸所」が開業しました。館長は小山久左衛門の娘婿で、「糸もつくるが人もつくる」と言われた小山房全です。房全は世界屈指の繰糸技術で生産した高品質生糸を他社に先駆けてアメリカへ輸出し、キリスト教信仰に基づいた工場経営で、従業員一人ひとりを大切にし、工場内教育や福利厚生活動の充実に尽力します。信用組合、商興会、知友会等の発足にも関わり茅ヶ崎町の発展に大きく貢献しました。

純水館茅ヶ崎製糸所製造の「ダブルエキストラ級」高品質生糸（左、中）と飛行舟をデザインした良質生糸（右）の生糸商標（茅ヶ崎市所蔵）

小山敬三作「純水館近郊」
（小諸市立小山敬三美術館所蔵）
現在の小諸市六供地区にあった純水館丸純工場を描いたものと思われる。画風から小山がフランスでの絵の修行を終えて帰国した1930年ごろから戦後まもない1940年代にかけての作品ではないかと思われる。
制作年不明 油彩・カンバス
23.8cm×33.0cm



（小諸市立小山敬三美術館提供）

小山敬三記念館
（小諸市立小山敬三美術館所蔵）
純水館の工場があった茅ヶ崎には小山家の別荘があり、フランスから帰国した小山敬三夫妻は、昭和4年（1929年）、その隣地にアトリエ兼自宅を建てた。没後の平成14年に小諸市の小山敬三美術館隣地に移設され一般公開されている。

（国土地理院引用）

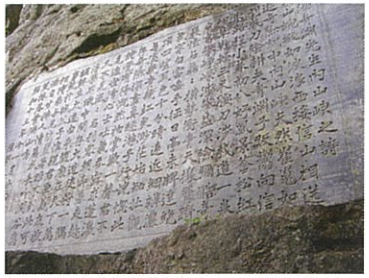
渋沢栄一と小諸

大正時代末期から昭和の初めにかけて、小諸の製糸業は全盛期を迎える。商業も盛んになり、銀行も相次いで開設された。また、大量の繭を保管する倉庫会社が作られるようになり、「製糸城下町」と言われるごとく、あらゆる産業が製糸業の隆盛とともに発展していった。大正3年に設立された小諸商工会は、大正12年に小諸商工会議所に名称を改めた。

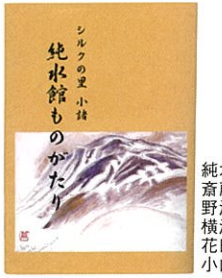
上の写真は大正六年五月十五日、渋沢栄一が講演会のため小諸に赴いた内容（信濃毎日新聞）で当時、小諸駅には100人程度でお出迎えした。

純水館視察ののち、相生町料亭岡源にて18時より、小諸商工会主催の歓迎会を250人規模で開催した。宿泊は小山久左衛門宅で一泊。2日目は小諸尋常高等小学校講堂で講演を行った。

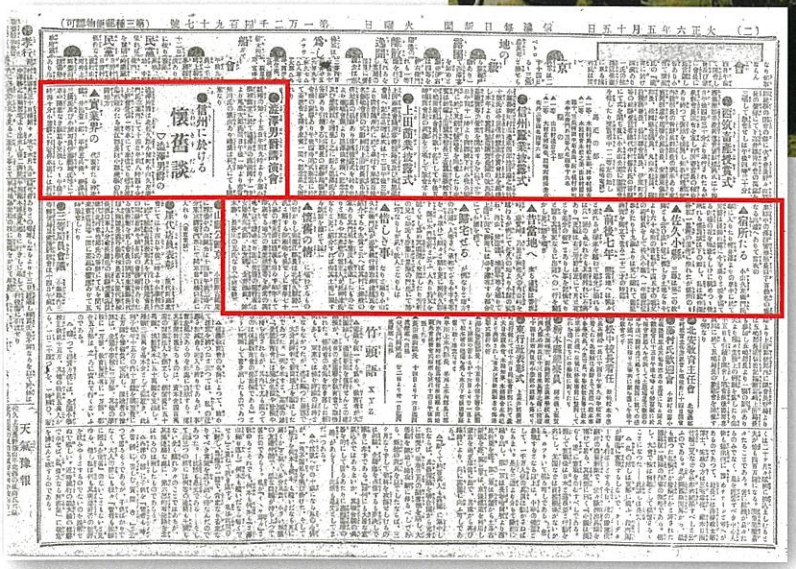
大正6年5月15日 小諸尋常高等小学校前にて 北佐久連合青年会総会
前列真ん中が大実業家の渋沢栄一、右隣の紋付袴姿が初代会頭 小山久左衛門



平四郎や久左衛門と親交のあった渋沢栄一の「内山峡之詩」



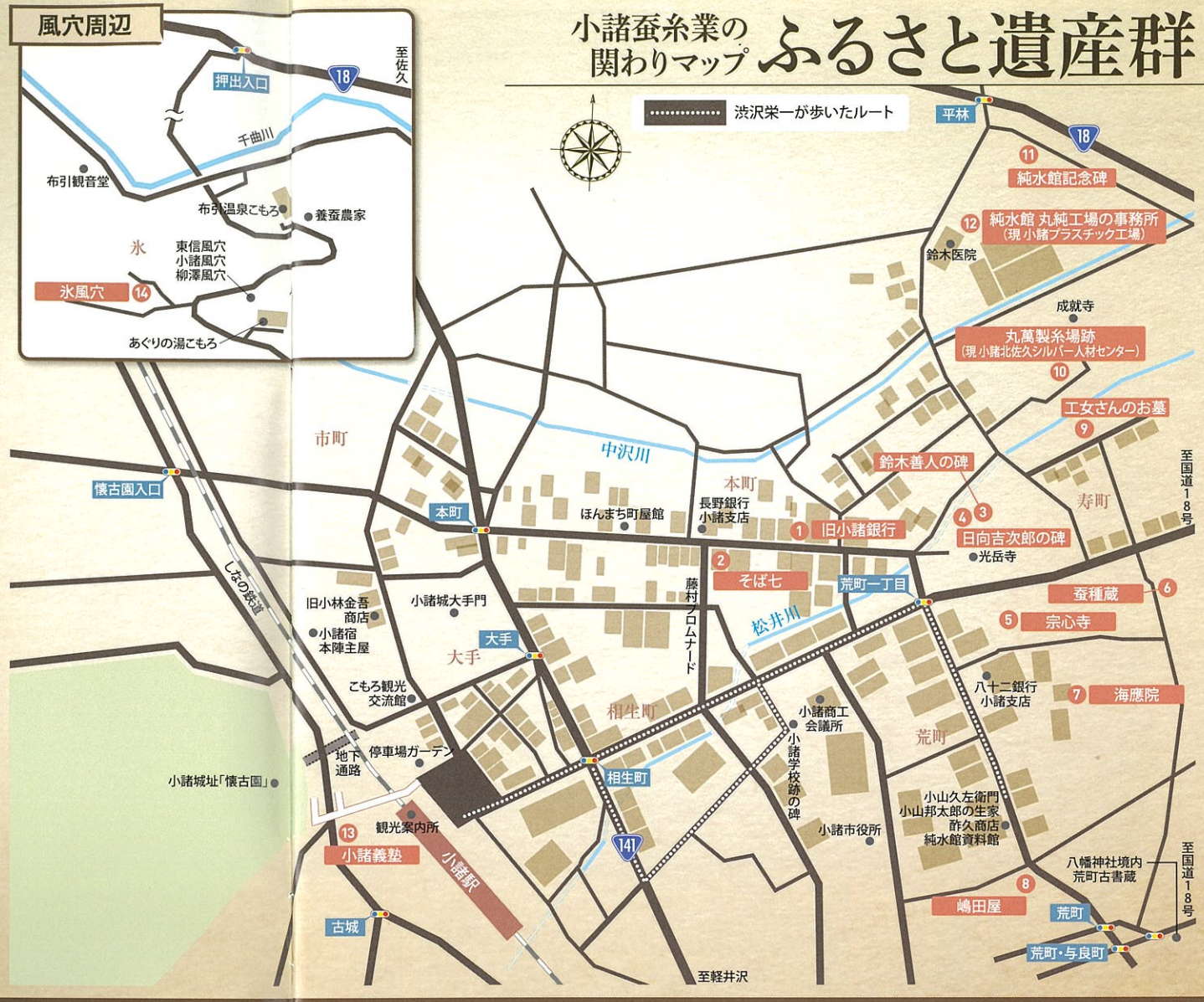
純水館研究会
斎藤 幸男（小諸市誌執筆者）
野澤 敬（長野県地理学会員）
横澤 瑛（長野県地理学会員）
花田佳司子（元丸純工場教婦）
小山正邦


大正六年五月十五日 信濃毎日新聞 第一万二千百九十七號

懐舊談

大正六年五月十五日、渋沢栄一が講演会のため小諸に赴いた内容（信濃毎日新聞）。

小諸蚕糸業の関わりマップ ふるさと遺産群



1

旧小諸銀行
大正初期、小諸では小諸銀行など3つの銀行が製糸金融を支えた。両側の防火壁・うだつが見もの。

2

そば七
江戸時代に建てられた本陣代。明治初期は料亭・源氏庵。富岡製糸場に赴く旧松代藩の工女らが昼食をした。

3

鈴木善人（1828～1899）の碑
囲碁の天才。明治元年、小諸の海應院碧落庵に定住。丸萬製糸場でボイラー焚きをする。弟子多数。

4

日向吉次郎（1851～1920）の碑
維新で流浪の旅へ。小諸の丸萬製糸場でボイラー焚き。謡の師匠で、弟子は300人。碑の文は島崎藤村。

5

宗心寺
県内最初の民間・丸萬製糸場を創業した高橋平四郎のお墓がある。

6

蚕種蔵
大正6年、小山家が設立した佐久蚕種株式会社。顧問は三吉米熊博士。夏秋蚕種を製造し、養蚕農家に供給した。

7

海應院
純水館を創業した小山久左衛門など、小山家のお墓がある。

8

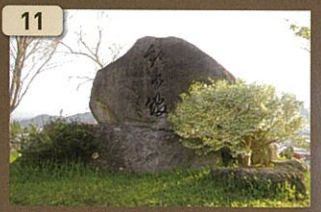
嶋田屋
高橋平四郎が嘉永5年（1852）に建てた。明治14年、松方デフレで丸萬製糸場が倒産。荒物商・嶋田屋が買った。

9

工女さんのお墓
純水館で働いていた5人の工女さんのお墓。出身地は、岐阜県高山市、富山県八尾市。年齢は22歳、21歳、19歳、13歳。

10

丸萬製糸場跡地
地元の民間資本だけで建てられた県内初の民営・器械製糸場。明治7年（1874）7月8日に操業。動力は水車。（現シルバー人材センター）

11


純水館記念碑 沿革碑
平成10年に建立。沿革碑には、純水館の歴史が書かれている。

12

純水館・丸純工場の事務所
純水館の看板が残っている。食堂と講堂の建物もある。唯一残された純水館の建物。（現プラスチック工場）

13

小諸義塾（1893～1906）
明治26年、木村熊二らが創立。明治32年、島崎藤村が赴任。小山久左衛門は、この私塾の運営を支えた。

14

氷風穴
明治期、天然冷蔵庫の風穴は、蚕種貯蔵に利用された。氷風穴も製糸の大量生産に貢献。現在も活用中。